

くらしナビ カルチャー



▲介護関係者が交流する「つどい場さくらちゃん」で話し合う日タイの両メンバー  
ら=丘唐島西宮市で、棚部季行撮影

地域のボランティアと村の高齢者宅を訪れた医師の長尾和宏さん（左）＝2016年  
▼ 2月、古山裕基さん提供



自宅を訪問し、末期患者の手を取り安心させるウイリヤさん（中央）。後方には読経する別の僧侶の姿がある  
＝ウイリヤさん提供（一部画像を処理しています）

違う日本に、そのままタイ農村の「みどり」のシステムを当てはめることは難しい。だが、タイ東北部を中心的に介護活動を続ける本プログラムの代表者、古山裕基さんは「日本とタイが互いを映し鏡のようにすると、自分たちのことが分かってくる」と強調する。「タイ側も日本で、地縁血縁に頼らない飛びつきを発見したのではないか。心豊かに死んでいける新しい日本人の死生観を探りたい」と述べた。

穏やかな死を迎える「みとりの場」はいかにして作り出すことができるのか。「アジアの隣人」の異なった死生観や宗教観、共同体のあり方から学び合おうと、日本とタイの宗教家、地域介護の専門家、医師らが互いの実践の場を訪問し、意見を交換した。本欄でおなじみ浄土真宗本願寺派の僧侶、釈徹宗さんは、このプログラム（トヨタ財団助成）の企画参加者の一人。釈さんとプログラムの一部に同行し、兵庫県西宮市で開催されたシンポジウムを取材した。【棚部秀行】

# タイの専門家と学び合うプログラム

れのタ イでは、僧侶が病院に入りし、読經したり、タンブン（功德を積むため食料などを寄進すること）を受けたりするのは日常的という。僧侶は認知症の症状がある高齢者や、末期がんの患者が住む家庭も訪問する。「年を取ること、死ぬことは自然なことであらってはいけない」とウイリヤさんは教えている。

タイ・バンコクの東北約500キロ。コンケン県クンダーン村の僧侶ウイリヤさんは、医師と村民の間に入り、死や病、健康について啓蒙する活動に取り組んでいる。今回タイ側のメンバーとして、公立病院の医師、地域看護を研究する大学教授らと共に来日した。「人生の最後にできることをしてあげたい。私は週に一度病院に行っています。家や病院でお経を唱えることで、患者だけでなく、家族も安心できます」。ウイリヤさんは自身の役割をこう説明した。

# 理想のケア 仏教根付く村に



自宅を訪問し、末期患者の手を取り安心させるウイリヤさん（中央）。後方には読経する別の僧侶の姿がある  
＝ウイリヤさん提供（一部画像を処理しています）

クンターン村の人「は約250人。寺は集会所の役割を担う。同村を訪れた糸さんは「一番まねできないと思ったのは、死期が近い寝たきりの人がタンブンすること。末期の人でも、施しをすることが大きな喜びなのです」と驚きを語った。

自宅の縁台にベッドを置き、村民たちに囲まれながら暮らす高齢者や病人。日本側はそこに理想的な終末医療や介護の実践「みどりの場」を見た。高齢者への訪問診療などを行う長尾クリニック（兵庫県尼崎市）の医師、長尾和宏さんは「地域包括ケア」（住み慣れた地域で最期まで暮らせる態勢）の原形がある」と

尾多重子さんは「仏教が大好きな心棒になつて、みんなが經營やかに旅立つ人を見守つていい。認知症になることや死が終わることではなく、怖がつてならない。日本にもこんな時代がありました」と語った。

一方、タイ側は関西を訪問し、ホテル並み設備を持つ大型特別養護老人ホーム、古民家を改装したホームホスピツムを見学。タイでは日本の介護保険にあたる公的支援が乏しいという。ウイリヤさんには「国のお金で面倒を見てもらえるのはいい制度だ」と評価し、「日本の施設や団体は

「相手を知れば自分分かる」

 「タイのお坊さんや医師がチー  
ムになって、在宅ホスピス的な活  
動をしているらしい」と聞いて、  
今年2月、クンダーン村のウサハ  
ット寺を訪れる一行に参加させて

「病床でも」の眼鏡。じつは、クンダーン村は高齢化が進んだ地域らしい。日本に比べれば、医療や福祉の状況も良好であるとは言えない。しかし、地域コミュニティーや信仰心が、老病死を受け入れる道筋になっていると実感した。特に「僧侶が来てくれなければ、タンブンができない。だから病床まで来てほしい」という事情は、タイの仏教文化の底力を見る思いであった。

**寄進**　4月にはタイのメンバーが来日して、私が運営に携わっている認知症高齢者のグループホーム「むつみ庵」（大阪府池田市）を見学。「このように普通の民家で暮らす形態は、我々にとっても実現可能だ。すばらしい方法だと思う」と共感してくれた。

力 入感してやめた。  
そして今回、さらに深く意見を交換する機会が生まれたのである。これからも互いに学び合っていくこととなりそうだ。（聖徹宗）